

国指定名勝

馬耶寺念天

豊後高田市教育委員会

おに す うるわ りょう せん てん ねん じ や ば 鬼が棲む麗しの稜線 天念寺耶馬

天念寺耶馬は、六郷満山寺院の中でも修行の寺として名高い「長岩屋山天念寺」の後背に聳える岩山の景勝地です。境内より上手には、岩林状に広がる岩峰群が広がっており、人々を寄せ付けない険しい土地でしたが、六郷満山の僧侶達の修行場として拓かれて以降悠久の歴史を刻んできました。

高く見上げた尾根に架かる石像アーチ橋「無明橋」^{むみょうばし}は、一帯の風景のシンボルです。その他にも多数の岩屋・石祠^{せきし}などの霊場や、鎖場や痩せ尾根などの難所があり、六郷満山の修行の厳しさを物語ります。現在では約10年に1度、六郷満山の僧侶達が国東の峯々をめぐる「峯入り」を執り行いますが、中でも天念寺耶馬は最大の難所として知られています。

一方で、六郷満山の各寺院の寺域などを示した「建武の注文(1337年)」によれば、寺域の北の境界を「美尾(美しい尾根)」と記しており、天念寺耶馬は古来より風光明媚な奇勝として愛でられてきたことがわかります。



天念寺耶馬

耶馬とは？

江戸時代の思想家・頼山陽^{らいさんよう}(1781-1832)が、山国谷(現・中津市)を訪れた際、その景色を中国風に「耶馬溪」と名付けました。その後、長年の風食によってできる奇岩の連続する風景を「○○耶馬」と呼んで親しむ文化が生まれました。国東半島には天念寺耶馬及び無動寺耶馬をはじめ、沢山の耶馬と呼ばれる風景があります。



「長岩屋山天念寺境内圖」
(上田秋成『大分県社寺名勝
図録』明治37年(1904年)より)

てん ねん じ けい だい れき し 天念寺境内の歴史

天念寺は、六郷満山^{なかやま ほん じ}中山^{ちゅう ざん}本寺^{ほん じ}の1ヶ寺で、養老2年(718年)に仁聞菩薩^{にんもん ぼくさつ}が開基したと伝えられています。中世には「長岩屋」と呼ばれ、境内は長さ25メートル程の大きな岩屋の中に横並びに展開しており、屹立^{きつりつ}する岩山の中に堂宇が建っているように見えます。寺院の中心にある講堂と身濯^{みそぎ}神社は一体となって建てられており、神仏習合の原風景を今に伝えています。谷の至る所に「坊」と呼ばれる小寺院が開かれていたとされ、かつては「住僧^{じゅうそう}」と呼ばれる身分の者しか、谷の中に住むことを許されていませんでした。

天念寺は西国東では唯一「修正鬼会^{しゆじょうおにえ}」が行われる寺院として有名です。僧侶が扮する鬼は「先祖の霊」とも「国東半島に古来より棲む神」とも言われ、松明で背や尻を打つ御加持によって、「五穀豊穰」「無病息災」などの集落の人々の祈りを叶えます。その歴史は古く、少なくとも鎌倉時代にはその原型ができていたと言われており、国指定重要無形民俗文化財に指定されています。



天念寺講堂・身濯神社



修正鬼会 (旧暦1月7日)

六郷満山とは？

国東半島の6つの郷(来縄郷・田染郷・伊美郷・国東郷・武蔵郷・安岐郷)に、最大65ヶ寺も開かれた寺院群のこと。本山(学問の寺)、中山(修行の寺)、末山(布教の寺)に分類され、古代～中世には巨大な組織を形成して1つの寺院として活動していました。

中世以前の各寺院は「〇〇山」「〇〇岩屋」と呼ばれ、険しい自然の中での「行」を重要視しました。



水害で流された護摩堂 (昭和初頭)

昭和16年の水害と天念寺境内の変遷

天念寺の境内は、昭和16年(1941年)に発生した三畑ダムの決壊による長岩屋川の氾濫でその大部分が流されてしまいました。水害の前の様子として、庫裏と一体となった国東半島独特の本堂や、川中不動の前にあった護摩堂、車橋や仁王像、鳥居などが古い写真に収められています。

講堂と身濯神社は一段高い所に建てられていたため、難を逃れました。ともに江戸時代後期の築と分かっています。

てんねんじ ほとけさま 天念寺の仏様

天念寺には、すぐれた平安時代の仏像が多く残されています。かつて国宝堂と呼ばれる岩屋に安置されていた6軀の仏像の内、4軀(釈迦如来・日光菩薩・月光菩薩・吉祥天)は現本堂に、2軀(阿弥陀如来・勢至菩薩)は鬼会の里歴史資料館に展示されています。

中でも木造阿弥陀如来立像は、天念寺耶馬内の「小甬子岩屋」に伝来した像と伝わり、高さ2mを超える巨像です(国指定重要文化財)。榿材の一木造で、大粒の螺髪やY字状の衣文は、古い平安仏に見られる特徴ですが、全体的には地方色の強い作品で、六郷満山における仏像制作のピークである平安時代後期のものとされています。

他の像は小振りで、欠損部分も多いものの、ほぼ同時期に造られたもので、腰高なプロポーションなど、六郷満山の平安仏の特徴をとらえています(すべて県指定有形文化財)。



木造阿弥陀如来立像 (鬼会の里歴史資料館)



木造勢至菩薩立像



木造釈迦如来坐像



長岩屋川に佇む川中不動

川中不動

境内の前を流れる長岩屋川の中に佇む巨岩に彫られた磨崖仏は、「川中不動」の名で親しまれています。中央の不動明王像の高さは約3.7m、両脇に控える二童子は約1.8mと大きく、明治時代の銅版画には「仁間作川中ノ不動」と記載されますが、実際は室町時代頃の作とされます。優しい顔立ちをしており、暴れ川であった長岩屋川を鎮めるために彫られたと伝えられています。

よく見ると梁を通した“ほぞ穴”が幾つか見え、磨崖仏の前に護摩堂が付属していたことも分かっています(P2下段参照)。

更に時代を遡る遺構として、磨崖仏の上部に陶製経筒を収めていた経塚が2つ発見されています。そのことから磨崖仏が彫られる遙か昔の平安時代からこの巨岩に対する信仰があったことが確かめられました。陶製経筒は鬼会の里歴史資料館で展示しています。

三浦梅園と天念寺耶馬

天念寺耶馬の風景を景勝地として捉えた最初の人物は、豊後三賢の1人で、江戸時代を代表する自然哲学者・三浦梅園(1723-1789)であったとされています。安岐町(現国東市)出身の梅園は、国東半島を周遊して地域の歴史を紐解き、とりわけ六郷満山について深い造詣があったとされています。

梅園は天念寺耶馬の風景について漢詩を詠み、その詩文を鳥居に刻んで残しました。残念ながらその鳥居は、昭和16年の水害で流されてしまいましたが、その一部が本堂脇に残されています。幸い古写真や、詩集『梅園詩稿』によってその全文を知ることができます。

「維此仙蹤遠自養老(この養老より続く行者達の足跡を)
仰夫神徳天門之道(靈験あらたかな天門の道を仰ぎ見る)
社鼓其鐘盪薦黍稻(社の太鼓を鳴らして、穀物を供え祀れば)
有凶斯感誠敬以保」(凶事をとどめ、神への敬いが保たれる)

養老の頃よりこの天念寺耶馬で修行に励んだ行者達の悠久の歴史に対して膨らませたイメージを漢詩にしたもので、行者の歩く峯道を「天門之道」と表現しています。



三浦梅園撰詩文鳥居残文

耶馬は寺院の歴史を映し出す

三浦梅園の天念寺境内の見方は、「借景」的な視点であったと言えます。

借景とは、日本庭園などに見られる技法で、遠くにある自然風景を、庭園内の風景に取り込むことです。

天念寺の境内も、本堂や身濯神社などが配置される狭い範囲を見るのではなく、背後の天念寺耶馬の風景と一緒に見ることで、1300年続く六郷満山の厳しい修行が行われた地であることをより一層感じることができます。梅園の視点で天念寺耶馬を見てみると、国東半島の寺院や岩峰の印象も変わってくるかもしれません。

天念寺耶馬を下から見上げた時に見える修行場には、無明橋や岩屋(火灯岩屋・龍門岩屋などが視認できます)、竜ヶ鼻の石祠などがあります。



天念寺耶馬遠景

てんねんじやば しゅぎょうふうけい 天念寺耶馬の修行の風景

六郷満山最大の修行「^{みね}峯入り」

六郷満山では、古の国東半島で山岳修行をしたとされる仁間菩薩の足跡を訪ね、半島の峯々を一周する修行「峯入り」を創始しました。宇佐神宮の記録には斉衡2年(855年)には峯入りを行ったことが記され、峯入りはわが国最古の回峰行の1つとされています。

近代になると六郷満山の僧侶達が連れだって峯入りを行う「集団峯入り」の形式へと変化し、現在では約10年に1度行われます。六郷満山では峯入りを踏破していない僧侶は一人前として認められず、また、峯入りの行列を先導する大先達は最大の名誉とされています。



江戸時代の峯入りのルート

天念寺耶馬の岩屋を巡る

天念寺耶馬には、麓から尾根に向かって、峯入り関係の史料で「イバラの内」と呼ばれる細道が拓かれています。その要所には岩屋と呼ばれる小寺院があって、それぞれが神聖な霊場として現在に伝わっています。

【忌堂岩屋】

「天念寺由緒書」によれば五輪塔を本尊とする岩屋。小型の国東塔や板碑なども祀られています。

【小両子岩屋】

天念寺の末寺として峯入りの札所にも連ねられています。鬼会の里歴史資料館の木造阿弥陀如来立像は、元々この岩屋に安置されていたと伝わっています。2つある岩屋の間には磨崖宝塔も彫られています。

【鳥岩屋】

不動明王の石仏を祀る小さな岩屋。崖を削って簡易な石段が造られています。

【福永岩屋】

毘沙門天の石仏を祀る小さな岩屋。かなり狭い窪状の地形を利用しています。

【火灯岩屋】

絶壁の鎖場の上にある岩屋。本尊は大日如来とされています。2段構成の岩屋に三十三観音が安置されています。

【龍門岩屋】

一連の岩屋とは少し離れた場所にあり、針の耳から尾根に上がると対面に見える岩屋です。天念寺の末寺として峯入りの札所にもなっています。2棟の建物を繋いだ現在の堂宇は、明治時代の銅版画にも描きこまれているものです。



忌堂岩屋



小両子岩屋



福永岩屋



針の耳



龍門岩屋（左）と岩林の風景



鎖場をゆく行者達



無明橋

針の耳をくぐって尾根へ…

火灯岩屋にたどり着くと、そこから先は天念寺耶馬の尾根へ登る道が続いています。くぐり抜けることは生まれ変わりを意味する細い岩穴「針の耳」を抜けると、危険な鎖場の連続がはじまります。

尾根に出ると南側の視界が一気に開けます。西側には都甲谷の集落が、東側には上長岩屋から鬼城耶馬(並石)にかけての岩峰群が一望できます。「人間の世界」と「鬼の棲む異界」の狭間に立っているような、国東半島でしか見られない風景です。

無明橋、そして無動寺耶馬の岩壁に出会う

天念寺耶馬の最深部、境内との高低差は実に100m超の岩場を繋ぐ、幅1.2m、長さ5.7mのアーチ橋「無明橋」は天念寺耶馬の修行を象徴する地として知られています。古くは「無命橋」と表記されることもあり、邪な心を持つ者、仏への信心がない者が渡ろうとすると、落ちてしまうと伝えられています。

明治時代の銅版画に見えず、大正時代に木製の橋から架け替えられたといわれていますが、架橋に関する経緯などは分かっていません。

無明橋のある尾根に至ると、北側(黒土側)の視界が開け、無動寺耶馬の岩壁がよく見えます。峯入りの行者達も次の目的地である無動寺の岩峰をここから眺め、法螺貝を吹いていたのかもしれない。

※注意

天念寺耶馬の峯道は修行場であり、鎖場などの大変危険な箇所が多く、ロングトレイルのルールに則った登山を除いては、関係者以外の入山を禁止しています。尾根からの景色は、写真や映像などでお楽しみ下さいませうお願いいたします。

2つの耶馬は峯道で出逢う 名勝

椿光寺

「天念寺耶馬及び無動寺耶馬」

- | | |
|---------------|--------------|
| ① 天念寺講堂 | ⑪ 火灯岩屋・針の耳 |
| ② 天念寺身濯神社 | ⑫ 龍ヶ鼻 |
| ③ 川中不動 | ⑬ 無明橋 |
| ④ 三浦梅園撰詩文鳥居残欠 | ⑭ 龍門岩屋 |
| ⑤ 天念寺本堂 | ⑮ 無動寺本堂 |
| ⑥ 鬼会の里歴史資料館 | ⑯ 無動寺身濯神社 |
| ⑦ 忌堂岩屋 | ⑰ 不動岩屋 |
| ⑧ 小両子岩屋 | ⑱ 無動寺無明橋・蟬ヶ鼻 |
| ⑨ 鳥岩屋 | ⑲ 無動寺耶馬展望所 |
| ⑩ 福永岩屋 | |

川中不動

天念寺

天念寺耶馬の解説は巻頭から

548

無動寺耶馬の解説は巻末から



天念寺耶馬のアーチが見える

654

無動寺



無動寺耶馬を見下ろす

13

12

14

無明橋

7

8

9

10

11

天念寺耶馬及び無動寺耶馬の風景は峯道で結ばれています。天念寺無明橋からは無動寺耶馬が見え、それと同様に無動寺無明橋からは天念寺耶馬が見えます。

千年以上変わらないこの景色は、僧侶や文人らによつて様々な視点で捉えられ、二つで一つの名勝となりました。

548

無動寺耶馬の修行場をゆく

無動寺耶馬の峯道をゆく

無動寺耶馬の霊場は、無動寺境内の隣に石段が見える身濯神社から入ります。

ある程度進むと山側の崖面に岩屋が見えてきます。岩屋に付属する小堂は岩を削ってつくった細い道の先があり、小堂が著しく風化しているため、近くに行くことは難しいですが、不動明王の石仏を祀っているため、「不動岩屋」と呼ばれています。

この不動岩屋を越えると鎖場が現れ、鎖を頼りに岩を削ってつくった階段を登り、岩壁づたいに先に進んでゆきます。すると、目の前に露頭を渡す無動寺耶馬の無明橋が見えてきます。無動寺耶馬の無明橋は、細長い棒状の岩を4本組み合わせ架けた幅1m、長さ4m程の桁橋です。



身濯神社



不動岩屋



無動寺無明橋



無動寺耶馬の頂上からの眺望

天念寺耶馬のアーチに出逢う

岩場を回りこんで無明橋を渡ると、南側に独立した露頭に出ます。その先には弘法大師の石仏を収める石祠があります。この露頭は下から見上げれば丁度蟬の頭のような形をしていることから「蟬ヶ鼻」と呼ばれており、よく見ると石祠の屋根の一部を下から確認できます。

そこに立つと、南側（長岩屋側）の視界が開け、天念寺耶馬の岩峰がよく見えます。よく見ると天念寺耶馬の無明橋のアーチも見ることが出来ます。峯入りの行者達も、無明橋を渡って天念寺耶馬を振り返って眺め、今までの行程に思いを馳せていたのかもしれない。

※注意

無動寺耶馬の峯道は修行場であり、鎖場などの大変危険な箇所が多く、関係者以外の入山を禁止しています。尾根からの景色は、写真や映像などでお楽しみ下さいませよう願っています。

種田山頭火と国東の耶馬

昭和四年（一九二九年）、国東半島を訪れた俳人・種田山頭火によって、無動寺耶馬一帯の景色は高く評価をされています。

山頭火は九州三十三観音霊場巡りで、豊後高田を訪れ、天念寺から山を越して椿堂、そして両子寺を詣でて、赤根の宿に泊まっています。その時に、萩原井泉水に宛てて出された書翰の中で「今日はしぐれる岩山を四つ越えました。両子寺、天念寺、椿堂、どれも岩山の景観を占めてをります。このあたりは小耶馬溪とでもいひたい山間であります」と一帯の風景について綴っています。また、俳句「いたゞきのしぐれにたゞずむ」などを詠んでおり、山頭火が秋雨に濡れた国東の風景に感動していた様子が伝わります。



しぐれる無動寺耶馬



屋山から見た国東の耶馬



椿 堂



おせったいの様子

豊後四国八十八箇所霊場とおせったい

現在、無動寺やその境外堂であった椿堂などにおいて、大師信仰が深く浸透しています。これは宝暦十年（一七六〇年）に天念寺僧・盛殿法印が、四国遍路道を行脚し、各霊場を都甲から真玉の谷に移したもの（豊後四国八十八箇所霊場）をはじめとし、国東半島中に広まったものです。中でも真玉谷のそれは真言宗の霊場となった椿堂を中心に盛んに行われ、弘法大師の石造を至る所で目にします。豊後四国八十八箇所霊場巡りでは、無動寺耶馬の霊場もルートに組み込まれ、各岩屋・無明橋などの難所もルートになっていきました。旧暦の三月二十一日には、弘法大師の石仏が伝わる寺院小堂や家々で「おせったい」と呼ばれる講が行われます。おせったいの日には、大人から子どもまで、各講を回って弘法大師に手を合わせます。

二躯の木造薬師如来坐像

鎌倉時代の六郷満山寺院の仏事の内容等を示した「安貞目録（一二二八年）」によれば、中世の無動寺の本尊は薬師如来であったとされています。無動寺には二躯の薬師如来像が伝来しています。

十二神将を周りに配する像は、高さ一五五センチ。無動寺本堂の像の中では最も古様を示し（十一世紀後半の作）、はっきりとした顔立ちに大粒の螺髪、胸部の肉取りも厚く、翻波式衣文の名残が見えます。旧無動寺から移動してきたと伝わり、中世の記録に見える無動寺本尊は、本像であると考えられます。

もう一躯の薬師如来像は、伝弥勒菩薩とされる像で、大きめな頭



木造薬師如来坐像 附十二神将

部などから、大日如来像と作風が似ています。高さは一二五センチで、十二世紀後半の作と考えられています。

表情豊かな石仏たち

無動寺本堂の裏手の丘陵には、小さな三十三観音霊場がつくられており、それを巡ることでご利益を得ることができるとされます。馬頭観音や如意輪観音の石仏は小さいながらも細やかにつくられており、心癒される空間になっています。

また、十六羅漢と十大弟子の石仏も並べられています。表情豊かな羅漢様と、その後背に聳える無動寺耶馬の岩峰の組み合わせは、無動寺境内の名所として多くの人が訪れます。



木造薬師如来坐像



五輪塔と十大弟子像



十六羅漢

無動寺の仏様

無動寺には平安時代のすぐれた仏像が多数残されています。木造薬師如来坐像（附 十二神将）・木造薬師如来坐像・木造大日如来坐像・木造不動明王像の四軀の像は、所謂半丈六の大きさを誇り、平安時代の無動寺がかなりの力を持っていたことが分かります。あわせて十六軀にもなる各像は全て県指定有形文化財となっています。

木造大日如来坐像

木造大日如来坐像は、高さ一七八センチと無動寺の仏像でも最も大きく、宝冠を着け、定印を結ぶ胎藏界の大日如来をあわらしめています。頭部はやや大きくつくられ、やや稚拙な表現もありますが、十二世紀後半の地方作と推定されています。



木造大日如来坐像

木造不動明王坐像

無動寺の現本尊は本堂内陣の中心に坐す不動明王です。高さ一一五センチと他の像と比べると少し控えめな大きさですが、丸みを帯びた頬などに見られる表現が、国風文化薫る平安時代後期の「和様」を見せ、肉取りや衣文等の表現は非常に洗練されており、国東半島地方仏の代表作の一つと言えます。

不動明王と言えば忿怒相を表し、宝剣や羂索けんさくによって悪魔を滅し、燃え盛る火災によって煩惱を滅する仏様ですが、六郷満山では峯入りの修行の際に僧侶達を守護してくれると厚く信仰されるようになります。柔和で優しい表情をした像が多くつくられるようになりました。この不動明王像も人々を優しく見守る存在として、「黒土不動」と親しみを込めて呼ばれています。

この像はかつて「中之坊」に所在したとされ、現無動寺に移動させるときに担ぎ棒が折れたため、そのまま旧無動寺傍の「不動屋敷」の小堂に移し、昭和に入って無動寺境外堂であった椿堂へ、昭和四十五年になって漸く現無動寺へと移動してきました。



木造不動明王坐像

無動寺境内の歴史

中世の無動寺境内（下黒土区身濯神社）

中世の無動寺は、「小岩屋」と呼ばれた寺院で、「安貞目録（一二二八年）」によれば、中山寺院の中でも多くの仏事を執り行う中核寺院の一つでした。場所は下黒土の身濯神社にあったとされ、同神社には無動寺時代の文化財が多数残されています。

現本殿は、人為的につくられた岩屋の中に鎮座しており、その近くに残された銘文から弘化二年（一八四五年）に現在の社殿配置になったと推定されます。

本殿が造られた岩壁には、磨崖種子と磨崖宝塔が彫られています。磨崖種子は、直径一三〇センチの円の中に阿弥陀如来の種子を刻むもので、鎌倉～南北朝時代のもものと推定されています。また、同時期の磨崖宝塔は西側四基、東側七基の計十一基あり、高さは約一メートルで側面に納入孔がつくられています。



旧無動寺（下黒土区身濯神社）



磨崖宝塔群



大正時代の無動寺（『西国東郡誌』より）



現無動寺本堂

無動寺の移動

旧無動寺の領域は広く、南北朝時代の六郷満山寺院の寺域などを示した「建武の注文（一三三七年）」によれば、末寺として三つの岩屋があったとされ、十二の坊が展開していたとされます。当時の文化財として、中之坊跡の中之坊磨崖仏（市指定史跡）や、領域内の四王石屋に造られた福真磨崖仏（県指定史跡）などがあります。

江戸時代後期に、無動寺は下黒土から中黒土の現無動寺へと、より良い修行場を求めて移動したと伝えられています。その際に、現無動寺の隣にある身濯神社も一緒に移動したと考えられています。

無動寺周辺地図



天を衝く不動の岩壁 無動寺耶馬

無動寺耶馬は、六郷満山の修行の寺「威王山無動寺」の後背に聳える岩山の景勝地です。境内の裏手には圧倒的な大きさの岩壁が迫っており、大正時代の地誌『西国東郡誌』では「奇勝中の奇、絶景中の景」と称され、それ以後、景勝地として知られるようになりました。無動寺は現在、不動明王を厚く信仰する寺院として著名ですが、無動寺耶馬の天を衝くような岩壁は不動明王のような力強さを持っています。

無動寺は江戸時代に川下から移動してきており、古代中世の頃、現無動寺の位置には「黒土」もしくは「黒土石屋」と呼ばれた寺院がありました。信仰の場であった岩屋や、鎖場・無明橋などの難所があり、六郷満山の修行の厳しさを物語ります。他にも豊後四国八



無動寺耶馬

十八箇所などの霊場巡りのルートに組み込まれ、やがてその中心的寺院となつてゆく椿堂の修行場にも利用されました。六郷満山の各寺院の寺域などを示した「建武の注文（一一三三七年）」によれば、東西の境を「美尾（美しい尾根）」としており、当時から岩峰に囲まれた景色の中に境内が形成されていたと分かります。

黒土石屋の歴史

黒土石屋は、六郷満山中山本寺の一ヶ寺で、六郷満山の寺院を列挙した「安貞目録（一一二八年）」によれば、馬頭観音を本尊とする「仙室（岩室）」の寺院であつ

たことが分かります。

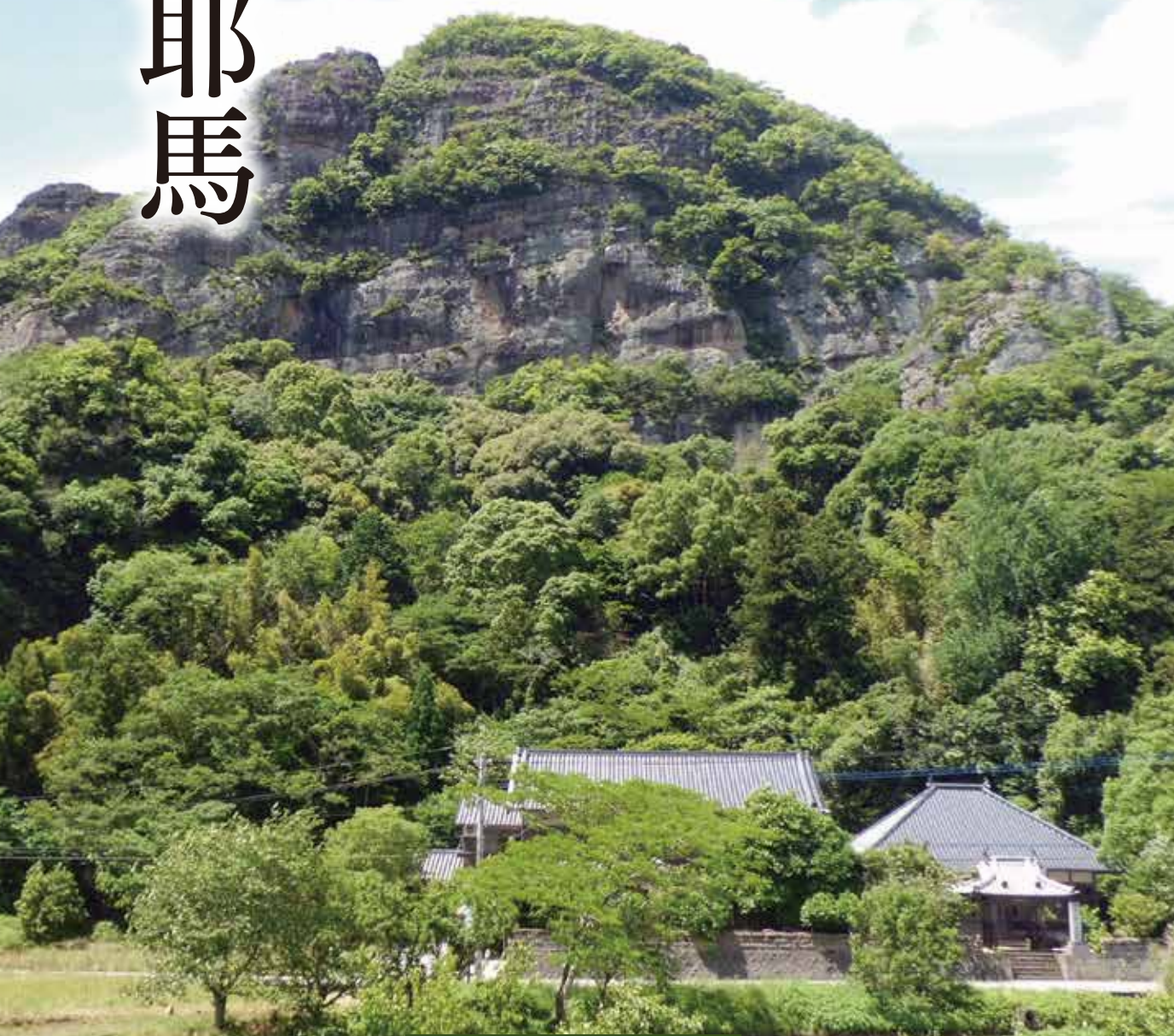
六郷満山で決め事をす
る際の中山寺院代表の
一ヶ寺になっている史料
もあり、当時は寺勢も盛
んであつたと思われま
す
が、時代と共に「黒土
山多門寺」「本松院（房）
」と寺名が変化し、現在
は上黒土に小庵が残って
いるにすぎません。境内
跡にあたる無動寺にも中
世の石造物が残されて
おり、特に本堂前に横た
わる巨大な宝篋印塔の部
材から、中世の黒土石
屋の信仰の強さをうかが
うことができます。



無動寺耶馬遠景

無動寺耶馬

国指定名勝



豊後高田市教育委員会